

明治二十年

(二月)

一月一日

暁五時起、一家恙なく儀式例の如し。

(二月二日～四日、日記ナシ)

(二月) 五日

例年之生徒新年会。来会者二百人余なり。

(二月六日～八日、日記ナシ)

(二月) 九日

赤阪御所に参る。新樹典侍、早蕨典侍、藤袴内侍、楓内侍様方の御大礼服、その美麗結構なる、仏国製と云ふ。其費一万円、実に驚き入たり。

(二月十日～十三日、日記ナシ)

(二月) 十四日

始めて西洋編物を生徒に教授す。

(二月十五日～十七日、日記ナシ)

(二月) 十八日

晨起、窓を開らく。密雪漫々として四望皓々、実に觀賞不止。午下雪積一尺余。生徒群集、雪打をはしむ。快甚。

(二月十九日～三十一日、日記ナシ)

(二月)

二月一日

(コノ日、記事ナシ)

(二月二日、二十八日、日記ナシ)

(三月)

(三月一日、二日、日記ナシ)

三月三日

川田小一郎君之招ニ応して、予、桃子、女弟子五、六人を拉して行。新邸落成、極て壮麗、二層楼眺望又妙。庭中一大老松あり。濡鷺之松と云。方数十歩。或伝ニ徳川大猷公より賜りたると云、大久保彦左衛門所有也。下に一大池あり。水禽游泳したる、真に図画中の如し。広間画幅檜松猿之図也。又大双幅木菴書。次室陸覆金泥梅花双幅。皆盛なるもの也。後、酒饌を饗せられ、余興、杵屋三弦、柳枝之落語なそにて、夜八時帰。

(三月四日、八日、日記ナシ)

(三月) 九日

朝八時、上杉伯使者来、口上、先生凶事をのぶ。是ハ不思議、なにかの謬ならんと。又、朽木子使来、凶事をのぶ。又、浜松人跡見暉一馳来、先生之死去を云ふ。其内続々、花筒之一対、菓子、香奠等、見舞者の泣者。宮原六之助君横浜より飛来、々客云、本日東京日々新聞に訃音広告欄にかゝげありとて、始而此新聞を見る。実に未曾有之珍事也。生徒等之驚云へからず。やはり例の如く授業もありて、夜親戚知人来りて祝宴を張る。

\*不思議 (不思議)

(三月) 十日

朝より弔喪者続々来る。新聞を取消せる。

(三月十一日、日記ナシ)

(三月) 十二日

三条公より御招ニ預り、相公及御簾中と共に、工科大学校にて洋人等の催しにて活人画を見る。山水之位置、人物之配合等ほとんど画の如し。奇観言へからず。始めて活人画をみる観客立錫之地もなき盛会也。此時伊藤博文、佐野常民様、私の過日之凶事ニ付、先生こそ寿命万歳と呼ばれたり。此凶事を動機として一大学校建築之氣運ニ及ふ。学校之地をいつ

れかと所々を尋ねて、今の小石川の地を観る。此地伝通院より風転病院之外、阿部邸跡之地のみ人家一軒もなく、すへて田圃のみ也。宮原六之助君も此地をと碇定ス。  
\*御(簾(レン))中 \*風転病(瘋癩病)

(三月十三日〜三十一日、日記ナシ)

(四月)

(四月一日、日記ナシ)

四月二日

西村喜三郎君、松野和邦、米倉一平、川村伝、茂木宗兵衛、田村利七、原善三郎、浜町常盤屋に会し、この七名を改築委員と定めたり。みな此美挙たるに大賛成を得たり。

(四月三日〜三十日、日記ナシ)

(五月)

(五月一日〜八日、日記ナシ)

五月九日

上野博物館に工芸共進会授与式あり。わか生徒絵画出品する。三等銅牌を受る者三名、褒状を受ル者五名あり。

(五月十日、十一日、日記ナシ)

(五月) 十二日

是日、清国人孫君異及通訳某と来。種々談話ありて絹本二葉に画を乞て帰。

(五月十三日〜廿日、日記ナシ)

(五月) 廿一日

宮原六之助君渡米ニ付誥別す。始て鹿鳴館に慈善バザを設けらる。物品を求めて帰。大臣かたの夫人令嬢の店に並ひて物売るさまおかし。

(五月廿二日〜三十一日、日記ナシ)

(六月)

(六月一日、二日、日記ナシ)

六月三日

宮原六之助君、北京号に乗て渡米ス。

(六月四日〜八日、日記ナシ)

(六月) 九日

池田氏の招ニ応して新富座劇をみる。有栖川親王も御臨観あらせられる。関原合戦、勸進帳、五人侠客。団十郎、菊五郎、左団次の芸術、実感歎言へからす。是芸家と云。

(六月十日〜十八日、日記ナシ)

(六月) 十九日

家嚴之茶事催あり。客、万里小路伯、裏松千代子、姉千代子、千久、予と五客。亭主被るものハ姉小路蓮観院よりの賜もの、光格天皇御衣小直衣、色濃茶、紋紗也。外に記すへきものハ井戸脇の茶碗、茶ヒ銘水鏡。外例の如し。

(六月廿日〜廿二日、日記ナシ)

(六月) 廿三日

学校改築之委員、茂木、米倉、河村、田村氏相談会を行ふ。

(六月廿四日〜三十日、日記ナシ)

(七月)

(七月一日〜五日、日記ナシ)

七月六日

麻布三条邸にて月見の宴を催さる。賓客、伏見宮織君様、近衛公、久我老侯、菊亭侯也。御酒饌席上揮毫。詩歌等。或謡曲之御余興中、雲晴月品湾之上より上りて、主客相共ニ興を添ふ。十一時家ニ帰。

(七月七日〜三十一日、日記ナシ)

(八月)

(八月一日〜八日、日記ナシ)

八月九日

此日より小石川柳町跡見女学校改築始となす。

(八月十日、日記ナシ)

(八月) 十一日

学校地棒表を建る。北白川宮様より御報ありて、稲子、去ル六日姫宮**妨婉**あらせられる。此方が今の**有間伯**の御夫人貞姫宮也。

\*学校地棒表(学校地榜表) \*妨婉(分婉) \*有間伯(有馬伯)

(八月十二日〜十八日、日記ナシ)

(八月) 十九日

日蝕。午後二時三十七分よりかけはしめ。「かけはしめ」と「九分九厘迄」の図  
星も見える。

白川にてハ皆蝕にて暗黒と云。

(八月二十日〜三十一日、日記ナシ)

(九月)

(九月一日〜五日、日記ナシ)

九月六日

学校、日々土を盛、地ならし、漸出来、土車日に二百台つゝ地行にかゝる。

(九月七日〜廿八日、日記ナシ)

(九月) 廿九日

食堂及湯殿、庖厨所、上棟式。

(九月三十日、日記ナシ)

(十月)

(十月一日〜八日、日記ナシ)

十月九日

寄宿舎上棟式。

(十月十日〜十九日、日記ナシ)

(十月) 廿日

柳町住宅上棟式。

(十月廿日〜三十一日、日記ナシ)

(十一月)

(十一月一日、二日、日記ナシ)

十一月三日 天長節 天晴朗。

講堂上棟式執行。西村喜三郎、信子、茂木宗兵衛、栄子、三条智恵君、山内八重子、松平頼子、松野和邦来る。午下一時、来客、生徒一同柳町に来る。塾の楼上来客を入れ宴を張る。是楼也、四望すれハ、北ハ森林にて、西ハ伝通院、東ハ丸山、田野にて稻実黄雲の

如し。秋色尤佳。南八平地田圃中。此校舍之西、川あり。水清浄。裏門の傍に千歳橋あり。風煙奇絶可喜。午後二時、棟梁職工凡百五十人、印法被を着、手拭を肩にかけて、木遣にて梁木を其梁上に建る。前に八束台をすへ、神饌を備え、五色の幣に鏡をかけ押し畢る。それより棟梁はしめ職工木遣を歌ひ、実に盛也と云へし。日暮全畢。

(十一月四日〜八日、日記ナシ)

(十一月) 九日

柳町建築所をみる。庭に池掘らす。

(十一月十日〜三十日、日記ナシ)

(十二月)

(十二月一日〜四日、日記ナシ)

十二月五日

小松宮、同御息所所欧州より御帰朝あらせられ、拝謁す。御機嫌の御尊顔を拝して、暫時御土産はなしを拝聴す。

\*御息所(所(衍))

(十二月六日〜八日、日記ナシ)

(十二月) 九日

三条様より御使野勢来りて、姉小路公義伯愈本月十五日比独逸出発、三月上旬御帰朝之筈。右ニ付外務省官舎借請青木氏、杉氏、担当せらるゝ事に相成たり。

\*愈(イヨ〜)

(十二月十日〜廿三日、日記ナシ)

(十二月) 廿四日

生徒試験全畢。寄宿生家え帰ル。部屋親なる者十名残りて寄宿舎移転之手伝する。

(十二月) 廿五日

暁起、移転執行。諸道具運送車六十廻、手伝人百五十。松野和邦氏、浦上万之助等来りて、

此日五大新聞及改新、読売、大坂朝日、女学雑誌に移転広告、生徒募集共掲載ス。

(十二月) 廿六日

寺田福寿来りて、大谷光瑩法主長女、二女、恵子、茂子様、御入塾願出られたり。

(十二月廿七日、日記ナシ)

(十二月) 廿八日

西村氏、茂木氏、原氏、米倉、川村、田村、渋沢氏と相談して、来一月八日開校準備と定むる。

(十二月廿九日～三十一日、日記ナシ)